

子どもの状態に崩れが生じたら

本年度が終わります。そして、あと一か月と少しで新年度に入ります。そういう時期だからこそ、あえてこのことを書いておこうと思います。子どもにおもわしくない状態が生じたとき、どう見直せばよいかということについてです。

おもわしくない状態とは言っても、その様相は一樣ではないでしょう。表面上は落ち着いているのだけれど学びに向かう活力が感じられないというものあれば、学びから外れがちな子どもが目立つようになったとか、教室に入れない子どもが生まれたとか、子どもの関係によくない兆候が表れてきたとか、もしかするとさらに深刻なケースも考えられます。ですから、なぜそうなったのか、そしてどう見直せばよいかということについて、それはこうだと一律に言えるわけではありません。ケースバイケースでしっかり考えるべきでしょう。ただ、子どもの状態に崩れが見られるとき、そこに共通する何かがあるのではないのでしょうか。そのことを述べておこうと思うのです。

1 「すべての子ども」に対する教育になっていないのでは？

教師は、すべての子どもの学びの保障に努めなければなりません。その認識と覚悟が曖昧で、子ども一人ひとりに目を注いでいないと、子どもによくない状態が生じやすくなります。

すべての子どもの学びを保障するのは簡単なことではありません。そうしようとしたら、いつも一人ひとりの状況に心を砕き、それぞれの子どもの思いや立場に寄り添い、どうしていくことがよいかと考えるしなければなりません。

子どもは、それぞれが、先生は自分のことをどのように見ていてくれるかを肌で感じています。難しい状況を抱えた子どもほどその感じ方は敏感です。子どもたちは、教師の目線によって、安定したり不安定になったりします。それほど、教師の存在は子どもにとって大きいものなのです。

教師がすべての子どもの、その時その時の状況や思いをすべてとらえるということは不可能なことです。それを完璧にできるものでなければ教師になれないと言ったら、教師のなり手はなくなるでしょう。しかし、子どもには寄り添ってくれる、自分を成長させてくれる大人が必要です。教師は、その役割を担うためにこの職業に就いたのです。教師は子どもたち一人ひとりの成長に携わっている、自分の目の向け方、対処の仕方によって子どもたちは伸びもするし停滞もする、そのことを忘れてはなりません。

あの子ども、この子どもと、心を砕き、思いをかけ、何かを感じたらすぐ対処し、学級がどの子どもにとっても居場所になるよう努めていくということは、並大抵のことではないのですが、それを遂行されていくときの教師には「ケアの心の持ち方」が存在しているのではないのでしょうか。「ケア」

とは、だれかのことを世話すること、配慮すること、気配りすることですが、そこにあるのは、他者に対して、他者のために尽くすという人間的な行動です。教師には、この心の持ち方と行動がなくてはならない大切なものと言えます。

子どもたちの状態が崩れるとき、この「ケアの心の持ち方」と行動に不十分なところがあったのではないか、教師は、真っ先にこのことを考えてみなければなりません。

2 子どもとの関係が築けていなかったのでは？

子どもの気もちが安定し、教室・学校が自分の居場所に感じられるかどうかは、教師がどう存在しているかということとともに仲間との関係が大きいと言えます。学年が上がるほど、それは増大していくのではないのでしょうか。子どもが崩れるとき、必ず人間関係の崩れが存在します。だから、教師は、常に、子どもとの関係に心を配っていなければなりません。少しの違和感も見逃さないように気をつけていなければなりません。

しかしそれは、子どもとの関係を観察しているだけでよいということではありません。教師は、子どもよりよい関係を築くことに努めなければなりません。教師が何もしないで子どもの良い関係が生まれる可能性は低いのです。そのとき、「すべての子どもの学びの保障」という理念のあるなしがすごく大きいものになります。すべての子どもが学べるということは、どの子どものことも大切にしているということです。教師は、そういう教室でこそ子どもの良質な関係が育つと考えなければなりません。

わたしたちは、ペアやグループで子どもたちが聴き合い、学び合うことをとても大切にしています。それは、学び合いによってすべての子どもの学びの保障に近づくことができると考えているからです。教師一人が何人も子どもに一律に教える「一斉授業」では、一人ひとりへの対応が不十分になります。どれだけ優秀な教師でもすべての子どものことがわかるわけではありません。でも、子どもたちが少人数でかかわり合えば、そこでどの子どもも話し聴き考え合うことができます。そうすれば、分からなかったら尋ね、難しいことだったら一緒に探究することができます。そういう意味で、「すべての子どもの学びの保障」にとって、ペアやグループの学びは欠くことのできない大切な学びの場なのです。

しかし、ペアやグループにするだけでそれが可能になるかと言えばそんなに簡単なものではないと言わざるを得ません。重要なのは、どういうペアやグループにするかということなのです。つまり、ペアやグループになって行う子どものかかわりに「ケアし合う関係」があるのかないのか、それが決定的に大切です。わからなさを抱えた子どもや間違いに陥っていた子どもが、安心してグループ内でそれを出して学べるには、それを受ける子どもたちの心の中に「ケア的な気持ち」がなければなりません。だれにでもわからなさや間違いもあるのであり、わからなさや間違いに温かく対応して寄り添ってともに考える関係がなければなりません。子どもの状況が崩れるとき、必ずこの子どもとの関係性が脆弱になっています。

では、この関係はどうしたら築けるのでしょうか。もちろん、それを築くのは教師です。教師こそが当たり前のように「ケア対応」をしていなければなりません。そうするよう努めながら、子どもにもそうしていくよう促さなければなりません。グループにするだけで涼しい顔はしてられないのです。つまり、教師も子どもも、その教室にいる全員で「ケアし合う関係」を築いていく、その意識

を前面に出して、強く、温かく、丁寧に、熱意をもって実行していかなければなりません。

子どもたちは、こうした経験によって、他者の存在の大切さ、困っている人にかかわる意味、支え合うかかわりの重要性、人としてともに生きる「共生」的感覚をはぐくんでいくのです。子どもの状態が崩れるということはそれができなかったということです。もちろん何年かにわたって不十分だった可能性がありますから、学校の全教員の問題としてとらえなければなりません。そう考えないで、よくない行動をする子どものせいにしてたり、特定の学級の教師だけの責任にしてたりすることはゆるされません。教員間にも「ケアし合う関係」が必要です。「ケア」ということに深く繊細な向き合い方をする教師や教師集団になること、それが学校にとってもっとも大切なことです。

3 カタチだけの授業づくりになっているのでは？

すべての子どもの学びが保障される学校は子どもたちがつながり合い・学び合う学校です。子どもがつながり・学び合う学校は、つながり合い・学び合っている教師によってつくられます。ですから、一部の教室に崩れが見られたとしても、それは教師たち全員の問題です。そう考えている学校では、きっと、前述した「すべての子どもの学びの保障」や「子どもの関係・つながり」ということについて、教師間でこれまでどれだけの取り組みをしてきたか振り返ってもらっているでしょう。

しかし、振り返ってもらいたいのはそれだけではありません。もっと根源的に、学校の取り組み方や教師間のつながりのあり方に欠けているものはなかったのか見直してもらい必要があるのではないのでしょうか。

たとえば、学校全体の取り組みとして、どの教科の授業であれペアやグループを取り入れたり全体で学ぶときは机をコの字に並べていたりしていたとしましょう。その際、以下のような教員間の共通理解があるのでしょうか。ペアやグループを取り入れればそれだけで子どもがよい状態になるわけではない、机をコの字に並べただけで子どもが学び合えるわけではない、「わからないと言える学級にしよう」と呼びかけただけですべての子どもの学びが保障できるわけではない、「聴くことが大切だから、しっかり聴きましょう」と促すだけで聴き合える子どもになるわけではない、これらはすべて「やり方」「方法」である、子どもの学び方や子どもの学ぶ意欲、そして学び合う子どもの関係は、「やり方」をマニュアル的に導入するだけで実現できるわけではない、ということです。

いままさに生きて育てている子どもを対象にする教育は、マニュアル通りにはいかない、教師ならだれもが知っていることです。にもかかわらず、多くの教師が「やり方」を求めます。「どういうふうにしたらこういう授業ができるの？」というように。

一日でも早くよい学級にしたい、子どもたちをよりよく育てたい、学びの深まるよりよい授業をしたい、だからどうしたらよいのか、そういう教師たちの気持ちはわかります。けれども、そのように考えている限り、よりよいものにはなっていないし、逆に、よくない状況を生み出すことにもなりかねないのです。「カタチだけ」の「やり方」は、力を持っていないし、それよりも子どもに見透かされてしまう底の浅さを持っているということを教師は認識しなければなりません。

何年も学校としての取り組みをしてきた学校で、子どもの状態が崩れるということもあります。そのとき、ほとんどの学校がいつの間にか「カタチだけ」になっていたのではないのでしょうか。立ち上げたときは、よく考え、みんなで意思統一して取り組み始め、それまでの状況から大きく転換したのだと思います。ところが、その頃の人々が転勤していなくなってしまうと、カタチだけが引き継がれて

いく、そうなりやすいのです。

やり方の無理な一本化も、カタチだけになりやすいということを認識しなければなりません。しつかりした協議をすることもなく一本化すると、たとえ全員がその「やり方」を実行したとしてもそれはカタチだけになります。それでは子どもに生きてはたられません。

大切なのは、常に、そのことの奥に流れる意味と理念を考えることです。そのため、本を読み、研究会に参加し、尋ねたり、ディスカッションしたりすることです。どんなことでも「原点」が重要です。「原点」についての学びを怠り、「そのまま引き継ぐ」「踏襲する」「従来通り」にしたり、逆によく知りもしないのに頑なに拒否したりしてはなりません。

物事は「カタチだけ」になったとき力を失います。教師はいつも、カタチだけになっていないか注意を払うとともに、何度も何度も「原点」に存在する「意味」や「目的」について考えることが大切なのです。

子どもの状態が崩れたら、崩れた子どものこと、崩れた学級のことに対して取り組むのは当然ですが、それだけでなく、学校全体で、教師のあり方について、子どもへの対し方について、授業のあり方について、絶えず見直すことです。それも学校全体で。それが当たり前のように行える学校になることで明かりが見えてきます。大切なのは、子どもにも同僚にも難しいことにも真摯に丁寧に向き合うこと、他者と学び合い支え合うことです。

ピンチをチャンスに変えるのは、諸々のありのままを見つめ見直す勇気です。

退職とは願いを引き継ぐということ

S先生が退職されます。授業者として全うされての退職です。S先生と出会ったのは10年ほど前です。S先生は、K市のK小学校のベテラン教師でした。その学校に外部協力者としてかかわらせていただくようになったことからS先生とのつながりができました。

初めてK小学校を訪問したときから、S先生の学級が他の学級と画然と異なっていることを感じました。教室に学ぶ空気がありました。子どもの目や顔つきが引き締まっていました。子どもと子どもにつながりがありました。そして、それはすべてS先生の存在感から来ていました。子どもの目を見つめてゆっくりと、しかしきりっとした口調で語るS先生のことばの重みにわたしは圧倒されました。

ある年、S先生がその学校のすべての教師が参観する授業をされました。ずいぶん前のことなのでその日の授業がどういう教材で行われたかは忘れましたが、文学教材による国語の授業でした。わたしは、いまでも、この授業のときに感じた文学的雰囲気を出し出します。授業の始まりにも、授業進行中にもたっぷりそれは感じたのですが、授業のどの場面だったかの記憶は定かではないのですが、S先生が子どもたちに語りかけた一言が、子どもたちのなかに、ふわあっと文学的雰囲気を醸し出していったあの瞬間を忘れることができません。その空気感にわたしは魅了されたのですが、それ以来、文学の授業の良し悪しは、授業方法や、読み取らせ方で決まるのではなく、教師の文学的素養で決まるのだとしみじみと思うようになりました。

1月のある日、S先生も出席される研究会に出かけました。その日は若い教師の二つの授業が報告され検討されました。30人近い参加者でした。授業づくりを学びたいという思いのある人ばかりの

集まりということもあって、率直で、けれども温かく丁寧で、建設的な協議が行われました。

S先生もちろん協議においてしっかりと自身の考えを述べられました。そこには後何日かで退職するという心配が全く感じられませんでした。というか、どこまでも授業づくりを追い求める実践者の一人だったと思います。

けれども、そういう存在の仕方でありながら、どこか、ここに集っている人たちを後ろから見守っているような雰囲気がありました。それは、報告された授業のあり方についてこうではないかああではないかと考えるだけではなく、この会に参加して学び合う教師たちを見ておられると感じたからでした。

このわたしの感じ方には伏線があります。この日の研究会に参加したのは、退職を前に、後に続く教師たちに授業づくりの思いを引き継ごうとしておられるS先生のお役に立ちたいと思ったからだったのです。そういうこともあり、研究会の最後に、話をさせていただいたとき、「この日参加したのは、まもなく退職されるS先生のため、S先生へのお礼の気持ちだった」ということを率直に述べたのでした。

退職とは、長く続けてきた仕事を退くということです。しかし教師の場合、退職を境にきっぱりとそれまで行ってきた仕事への思いを切り捨てるということにはならない人のほうが多いのではないのでしょうか。子どもとかかわること、子どもに対して授業を行うこと、それは責任を伴うことです。時には大変な悩みに突き落とされることもあります。それでも、子どもとかかわる仕事の魅力が教師から消えることは少ないのです。

もちろん、退職して学校教育と全く関係のないことを始められる人もいます。ちがう世界を楽しみたいという人もいます。これまでできなかったことをやりたいときっぱり教育とのかかわりを絶つ人もいます。それらの人たちの思いもわかります。けれど、そういった人たちでさえ、体には子どもたちと過ごした日々の感覚が染みついていてなくなることはないでしょう。

S先生は、子どもとかかわる教師の仕事に深く向き合ってこられた方でした。その思いは、退職しなければならぬこの時になっても、心の中に脈々と流れているようでした。そして、自分が退職した後の学校で子どもたちと向き合う後輩教師たちに強い思い、願いを抱いておられるようでした。

この研究会は発足して2年目の若い会です。その会が始まったときからS先生は積極的にかかわってこられたようでした。それが感じられたから、退職前の最後のこの会に参加させてもらおうと思ったのでした。

私は、退職してから14年経ちます。けれども、この14年間、ずっと外部協力者として学校へのかかわりを続けてきました。だから、まだ退職していないという感覚があります。わたしの学校教育からの退職はまだもう少し先になりそうです。でも、その心構えはいつの間にか生まれているようにも思います。そして、それは、S先生のお気持ちに通じるところがあるように思います。

考えてみれば、わたしは、S先生をはじめ、たくさんの先生方と出会い、深くかかわらせていただくことができました。外部協力者としての日々は、そういう人たちとの出会いの喜び、そして、教育のあり方について次々と気づくことのできる有難さに満ちています。

そういう一年が、今年も終わります。来年度に心を馳せながら、本年度の締めくくりとさせていただきます。一年間ありがとうございました。